

# 演習を通して保育での教育的コミュニケーション機能を学ぶ 教育方法論の取り組み

—絵本の読み聞かせ場面を例に—

真下 知子

幼稚園教諭養成課程の「教育方法論」では、教授・学習過程のコミュニケーションの学習において、保育現場で保育者が日常的に行う「絵本の読み聞かせ」を例に、学生がこれまでの経験を想起したり、保育現場での子どもとのやりとりを想像して考えたりする機会を設けたうえで、理論とのつながりを意識できる授業の設計と実施に取り組んでいる。本稿では、三方向の教育的コミュニケーションの機能について学ぶ授業実践と受講後アンケートの結果を報告する。

キーワード：教師教育、授業設計、保育者養成、コミュニケーション

## 1. はじめに

社会の変化に伴い、大学教育に大きな期待が寄せられている一方で、高等教育のユニバーサル化を背景に、学ぶことに対する大学生の目的意識、問題意識の欠如、学習時間の少なさ、基礎力の低下など様々な問題が指摘されてきた(中央教育審議会 2012a, 2012b)。このような状況は、専門職の養成教育を行っている大学や短期大学においても例外ではなく、指導上の課題への対応が模索されている(長谷部 2010)。

本学の幼児教育学科においても多様な学生が共に学ぶ中で、学生一人ひとりが学習内容を既有知識や経験と結びつけ、関連する科目や実習での学びに活用していこうとする意欲や態度を育成することが不可欠である。そこで、筆者が担当している「教育方法論」では、グループワークを通して、学生が日常の経験を想起したり、保育現場での子どもとのやりとりを想像して考えたりする機会を設けたうえで、理論とのつながりを意識できる授業の設計と実施に取り組んでいる。

本稿では、保育者と子どもとの間の三方向の教育的コミュニケーション機能(坂元 1991)について学ぶ授業実践と受講後アンケートの結果を報告する。

## 2. 教職科目「教育方法論」について

### (1) 「教育方法論」の内容・方法

「教育方法論」は、教授・学習過程のコミュニケーション、授業の設計、実施、評価、改善のサイクルおよび教育メディアの活用に関する内容を扱っており、幼稚園教諭二種免許取得のための必修科目である。本授業の授業計画(シラバス掲載用)を表1に示す。

### (2) 授業の方法

- ①対象：幼児教育学科2年生 131名
- ②開講時期・時間数：前期、90分×15回
- ③授業形態：講義(40名程度のクラス単位)・演習(5～6名のグループ学習)

表1 教育方法論授業計画 (シラバス掲載用)

回	内容
1	教育方法と技術について
2	教授・学習過程におけるコミュニケーション
3	情報伝達と相互理解 (演習)
4	教授・学習過程における教材の役割
5	教育メディアの特徴と機能
6	教育メディアの種類と活用方法
7	授業の設計・実施・評価・改善のサイクル① - 設計・実施段階 -
8	授業の設計・実施・評価・改善のサイクル② - 評価・改善段階 -
9	マイクロティーチングとは
10	マイクロティーチングを参考にした模擬授業① - 模擬授業の設計 -
11	マイクロティーチングを参考にした模擬授業② - 模擬授業の実施と相互評価 -
12	マイクロティーチングを参考にした模擬授業③ - 代表グループの発表と振り返り -
13	幼児教育におけるコンピュータ・インターネットの利用① - 教材としての活用 -
14	幼児教育におけるコンピュータ・インターネットの利用② - 教育情報の活用 -
15	教育工学的な授業改善の手法

### 3. グループワークの演習を取り入れた「三方向コミュニケーション」の学習

坂元 (1991) は、教授・学習過程における教師と学習者間のコミュニケーションを①指導者が「伝える・動かす」、②学習者が「かえす」(指導者が「とらえる」)、③指導者が「はたらきかえす」という「三方向のコミュニケーション」とし、指導者に求められるコミュニケーション機能について論じている。受講者は、保育においてもこれらのやりとりが絶えず行われていることを知り、①～③までのそれぞれの機能 (表3) について学習したうえで、子どもとの効果的なコミュニケーションのあり方について考えることが必要である。従来、これらの内容については、講義により行ってきたが、様々な具体例を交えながら解説しても冗長になりやすく、学生

の興味、関心をひくことが難しいと感じられた。毎回の授業で学生が記述するコメントカードからも、理論的な内容の説明が学生に理解し難く、実習等での子どもたちとの関わりと関連付けが行われていないことがうかがえた。

そこで、講義のみによる学習形態から、グループワーク (以下 GW とする) による演習を交えて実施することとした。

#### (1) 本実践の目的

教授・学習過程におけるコミュニケーションを保育現場での「絵本の読み聞かせ」を例に考え、実際に演じてみることにより、指導者 (保育者) のコミュニケーション機能について理解を深める。

#### (2) 授業の流れ

授業の流れを表2に示す。

表2 授業の流れ

回	活動内容	形態
1	オリエンテーション	講義
2	①三方向コミュニケーションとは? ②「絵本の読み聞かせ」場面を想定し、保育者、子ども間で行われる三方向コミュニケーションの活動を考え、書き出す ③ペア→グループで共有 ④興味深いやりとりを選び、発表の準備 (提示資料作成と実演の準備)	講義 個人  ペア GW
3	①発表の準備 (仕上げ) ②グループによる発表 (実演)	GW
4	三方向の教育的コミュニケーション機能	講義

第2回の②で個人が作成したシート、第2回のグループワークで作成し、第3回の発表に使用した提示資料を図1、2に示す。また、第4回の講義で使用した配布資料のうち、「指導者の各コミュニケーション機能」に関する内容を表3に示す。

グループワークの活動風景を図3に、実演による発表の様子を図4に示す

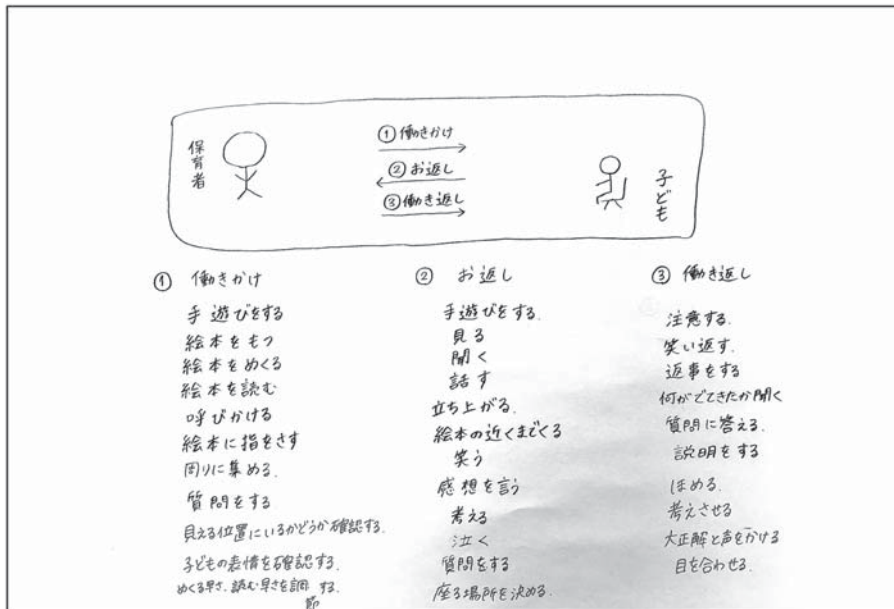


図1 個人で作成したシート

あらすじを言う。(4枚)

①! 本を読む。

②!! あらすじを先に言う。

③!!! 次に期待を持たせる。

図2 発表用提示資料

表3 指導者の各コミュニケーション機能

コミュニケーション	機能		各機能の例
①伝える・動かす	提示	情報提示	目標・内容・資料提示、説明、演示、助言、予告
	反応制御	喚起 統制	発問、問いかけ、問合い、指名、要求 指示、誘導、合図、注意
②とらえる	評価	診断評価	机間巡視、観察、点検、診断
③はたらきかえす	KR	知的 KR	肯定、否定、正誤、まとめ
		情的 KR	承認、励まし、賞賛、皮肉、おわび、冗談、しかる、無視



図3 グループワークの活動風景



図4 実演による発表の様子

#### 4. 受講後アンケートの実施

「三方向コミュニケーション」の学習に関する興味・関心、知識・理解、有効性について調査するため、授業後に受講者（119名）を対象としたアンケート調査を実施した。

##### (1) 質問項目

1～3、7、8の項目は、(1. そう思わない～5. そう思う)の5件法、4～6は自由記述による回答を求めた。

1. この授業で扱った三方向コミュニケーションは、あなたにとって身近なものだと感じられましたか？（親しみ）
2. 三方向コミュニケーションについて考えることは、面白かったですか？（興味・関心）
3. 三方向コミュニケーションについて考えることは、難しかったですか？（難しさ）
4. グループで実演を交えて発表するために資料を作ったり、話し合ったりしたことで、あなたが気付いたことや感じたことを自由に記述して下さい。（気づき）
5. あなたのグループで発表した三方向コミュニケーションのやりとりを記述して下さい。  
①働きかけ、②お返し、③ 働き返し
6. 5であなたが記述した①の働きかけは、プリントの表「各コミュニケーションの機能」の何に当たると思いますか？（知識・理解）
7. この一連の学習を通して、三方向コミュニケーションの機能について、理解できたと思いますか？（知識・理解）
8. この一連の学習は、実習や就職後に子どもとやりとりをするうえで役立つと思いますか？（有効性）

#### 5. 結果・考察

受講後アンケートの結果のうち、質問1～3、

7、8（5件法）の回答の平均値とSDを表4に示す。

表4 選択肢による回答の平均値（SD）

1. 親しみ	2. 興味・関心	3. 難しさ	7. 知識・理解	8. 有効性
4.43	4.16	3.73	4.03	4.43
(0.70)	(0.72)	(0.85)	(0.57)	(0.70)

※カッコ内はSD

1. 親しみ、2. 興味・関心、8. 有効性について、平均値が4以上の結果となっているが、3. 難しさについても3.5を超えており、興味や意義と同時に難しさも感じている学生が多いことがうかがえる。

7. 知識・理解については、自己評価のみならず、GWで取り上げた場面における保育者の活動をコミュニケーションの機能の観点から正しく理解できているかを調べるために、質問5、6を設定した。しかし、大多数の回答者が質問5で、①働きかけとして、保育者が「絵本を読む」という活動を取り上げたため、質問6の回答は、「情報提示」「資料提示」がほとんどであり、回答が容易であったと考えられる。従って、学習の目的である「コミュニケーション機能の理解」の度合いについてはさらなる検討が必要である。

自由記述項目の4. グループでの演習を通じた気づきについては、105件の記述が得られ、主に7つのカテゴリーに分類することができた。記述例とともに以下に示す。

##### ① GWによる視点の転換や広がり（29件）

例) 「グループ内でもひとつの行動についていろいろなとらえ方があるんだなと思いました。」

##### ② 多様な働きかけ、働き返しの可能性（19件）

例) 「働き返しの仕方はとても様々であって、

状況によって考えないといけないのだとわかった。」

③子どもの反応の多様性 (13件)

例)「様々な場面をイメージして、いろんな幼児がいるなど感じた。絵本を聞いていない子、反応を返してくれない子等。」

④経験の想起、共有 (13件)

例)「実習を振り返り、意見を共有できて良かった。」

⑤子どもへの対応の難しさ (7件)

例)「働き返しがとても難しい。子どもの発言は予想がつかないと思った。」

⑥日常のコミュニケーションの捉え直し (5件)

例)「いつも日常で話していること自体が三方向コミュニケーションだったと知った。」

⑦言葉かけの大切さ (3件)

例)「子どもの疑問に対してただ教えるだけでなく、子ども自身が考えられるように促す声かけが大切。」

これらの結果より、学生に身近な「絵本の読み聞かせ」を例に、演習を取り入れた本実践は、「三方向の教育的コミュニケーションモデル」や「指導者の各コミュニケーション機能」といった理論に関する興味、関心の向上にも有効であったと考えられる。

個人で三方向のやりとりを書き出す活動では、これまでに絵本の読み聞かせをした経験を振り返ったり、子どもの反応や働き返しの方法を想像してみたり、一人ひとりが能動的に考えるという活動が行われたと考えられる。そして、ペア、グループでの活動によって、個人では思いつかなかった様々なやりとりや対応方法に関

するアイデアが共有されたことがうかがえる。さらに、対象年齢、場面の設定を行い、実際に演じてみることで、保育者、子ども、それぞれの視点での多様な気づきが促されたと考えられる。これらのプロセスを経ることによって、従来の講義のみによる学習に比べ、学習内容に対する学生の興味、関心が高まったと推測できる。しかし、今後、講義のみの場合と演習を併用した場合、講義と演習の順序等による教育効果の違いについて実証することが必要である。それらを通してより良い授業設計、方法を検討していきたい。

本稿は日本教育情報学会第30回年会での口頭発表(真下、2014)に基づいたものである。なお、本実践は現在も継続して行っており、活動風景は2016年度のものである。図1～4については、撮影および掲載に関して学生の許可を得ている。

<引用・参考文献>

- 中央教育審議会、大学分科会大学教育部会第10回審議資料、2012a
- 中央教育審議会、新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—(答申)、2012b
- 長谷部比呂美、短期大学生の自己教育力に関する検討(2) —保育学生の自己教育力の推移—、淑徳短期大学研究紀要、49、p.112、2010
- 加藤かおり、学習者中心の大学教育における学習をどう捉えるか—深いアプローチを手掛かりに—、大学教育学会誌、35(1)、p.57-61、2013
- 坂元昂、『教育工学』、放送大学教育振興会、1991
- 真下知子、理論と実践のつながりを重視した「教育方法論」の取り組み：保育における三方向コミュニケーションの学習を通して、日本教育情報学会年会論文集、30、p.62-63、2014